ま・ち・か・どズームIN!

みなさんからのすてきな情報を待ってます!

よい子になれますように
北保育園でだんご刺し

1月9日、北保育園で小正月の伝統行事「だんご刺し」を園児や祖父母たちが体験しました。

園児たちは、「よい子になれますように」「お米や野菜がいっぱいとれますように」とお願いしながら、つき上がったお餅を丸め、自分たちで描いた魚や野菜の縁起物と一緒にミズキの木に飾りました。

このミズキの木は、公立刈田綜合病院にも飾られ、来院者もほほえましく見入っていました。

輝かしい初日に手を合わせました
白石城で「初日の出を拝む会」

1月1日の早朝、白石城で「初日の出を拝む会」が開かれました。

この日の空はきれいに晴れ渡り、例年にないほどおだやかな年明けだったこともあってか、家族連れや若者たちのグループなど約200人が三階櫓から初日の出を拝みました。

東の空が少しずつ明るくなり、輝かしい初日が姿を見せると、参加者たちから歓声が上がり、「今年一年良いことがありますように」と初日に手を合わせたり、写真撮影に興じていました。

武家屋敷で「七草の会」

1月7日、片倉家中武家屋敷「旧小関家」で、万病や邪気を除くといわれている七草がゆを味わう催しが開かれました。ヘルスメイト白石の皆さんの協力で100人分の七草がゆが用意され、親子連れなどが春の七草を数えながらいろりを囲み、温かいおかゆをほおばりました。

白石市民ふれあいコンサート

12月31日の大みそか、市中心部の旧高甚跡地で、市民手づくりのコンサートが開かれました。コンサートでは高校生や兄弟親子のバンドなど5組が熱演。会場では、大鍋で煮込んだすいとん汁もふるまわれ、買い物客も足を止めて、心も体もぽかぽかになって聴き入っていました。

「ほっぷんちょ」ふれあいひろば

12月17日、子育て支援学習会（愛称・ほっぷんちょ）で「親子でホットクリスマス」と題したふれあいひろばが開かれました。参加した就園前の子どもたちと保護者60組は、クリスマスにちなんだ手遊びやゲーム、絵本の読み聞かせなど、親子で楽しい時間を過ごしました。

農業とリサイクルを実体験
シリウスでいちごつみ取り試食会

1月10日、福岡長袋の生ごみ資源化事業所「シリウス」に隣接する実証農園「親子ふれあい農園」で、昨年9月にいちご苗を植栽した小学生親子を対象に、いちごつみ取り試食会が開かれました。

参加した40家族・約100人は、赤く色づいたいちごをおいしそうにほおばりながら、農業やリサイクルを実体験していました。

この「シリウス産」のおいしいいちごは、1月末からポーチパーク内の「青っ葉市」で委託販売されます。

清らかな心で新年を
白石城で除夜の鐘

大みそかの夜、清らかな心で新年を迎えようと、白石城の鐘堂から除夜の鐘が城下に鳴り響きました。

夜11時を回り、新年が近づくにつれて続々とつめかけた家族連れやカップルなどが、それぞれの思いを込めながら勢いよく鐘を打ち鳴らしました。やがて新年への秒読みが始まり、新年を迎えた瞬間には、大きな拍手がわき上がりました。

幼年消防クラブも登場
平成16年消防出初式

1月12日、約600人もの観客を集めて、消防団員など750人が参加した消防出初式がホワイトキューブで開催されました。

式典では、機械器具などの点検作業に続き、ひかり幼稚園年長組の園児約100人が登場。火遊びをしないなど「防火の誓い」をして、「戸締まり用心・火の用心」と火の用心のうたを元気良く歌ってくれました。

続いて消防団階子乗り隊の皆さんによる、消防団の心意気を示したはしご乗り演技が披露され、大観衆から盛んな拍手を受けていました。

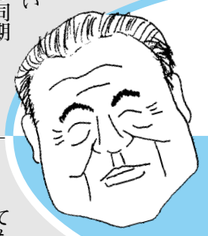
いろりを囲んで民話や伝統行事
第1回「冬の検断屋敷まつり」

1月12日、雪化粧して風情を増した材木岩公園内の検断屋敷で、冬の検断屋敷まつりが開催されました。

まつりでは、子どもたちがお年寄りたちからだんごさしを教わったり、あずきや米のだんごが入った「あかつきがゆ」が振る舞われるなど、小正月の伝統行事を体験しました。

また、NHKキャスターのかわのめえりこさんが、「鎌倉山の百足岩」などの民話を身振り手振りを交えてユーモアたっぷりに披露して、検断屋敷いっぱいに詰めかけた観客を民話の世界にいざないました。

川井市長の せせらぎトーク



「新しい湯治の宿」

宮城県の温泉に元気がない。秋保温泉のひとり勝ちだ。白石をはじめ、他の温泉は軒並み客足が落ちている。しかし、これからの人口動態の中で、農業、文化、観光、風土などの地域資源を活用して、どのようなテーマで他地域と競争し、あるいは連携するかが活性化の道だ。

してみると、温泉の持つ役割はもう一度見直さなければならない。それなのに聞こえるのは、どこそこの宿がクローズした、どうもあそこも危ないらしいなどという話ばかりだ。

友人に佐々木智子さんがいる。私の東北大学経済学部の同期には、女子学生は二人しかいなかった。彼女は、才色兼備。ゼミの点数が断トツなのは、美人代が加算されていると、ヤッカミ半分の伝説があったほどである。同級生と結婚し、旦那は一流企業の副社長まで勤め、現在は悠々自適。彼女の方は老いて益々盛んで、色は昔に及ばずといえども、才は今でも大したものである。

彼女が送ってくれた、温泉についての考え方と体験を紹介しよう。

「こんな温泉宿がある といいな

基本的に日本人はお風呂好きな上、このところ東京でもお台場、後楽園に温泉を掘って新しもの好きの若者が大勢押しかけている。ただ年配者にとっては、面白半分にしても行ってみたという人をあまり聞かない。結局、多少とも金銭にゆとりのあるシルバー世代？の嗜好を要約すると

一. 古びてても手入れの行き届いた宿。
二. 湯は源泉を使ったかけ流し。
三. 料理は皿数が少なく、地元の産物を使ったもの。
四. 宿泊費は極端に高くない方がよい。
五. なるべく和室に泊まりたい。

「マタギの里（三セク）

秋田内陸縦断鉄道阿仁マタギ。三泊中最もよかった。従業員の接客態度もきびきびしていて、料理も郷土料理を主にした美味なもので、特別に頼んだ熊鍋にも気持ちよく応じてくれた。部屋からは緑の山が四方に見える。名古屋、大阪からのリピーターも多いとか。」

と、まさに絶賛である。

なになに？「古びてても手入れの行き届いた宿」古いたたずまいは、鎌先温泉にいくつも残っているではないか。手入れして活用すれば、大受けだろう。

「湯は源泉を使ったかけ流し」結構でしょう。緑濃い小原渓谷には、利用せずに垂れ流している湯がある、もったいない話である。遊歩道を整備して、足湯を作ろうではないか。また、古湯を復元させたらどうか。浅野知事に『古湯は、お尻の下から湯がわき出る湯ですよ』と言ったら、目を輝かせていた。

「料理は、皿数が少なく地元の産物を使ったもの」ガッテンだ。モクズガニや川エビをきれいな湧水で養殖しましょう。地元産の手打ちそばに付ける天ぷらは、摘みがけの山菜や、川に自生するクレソン。

「宿泊費」そんなあなた、箱根や湯河原と比べたら安すぎるくらいですよ。まねしたいのは、連泊の食事に同じものを出さない心づかい。

「なるべく和室に泊まりたい」洋室なんてほとんどないんだから。応挙や大観は無い代わり、清潔さには充分な心配りを。

県の支援を受けながら、遠刈田、青根と連携し、ハードが行政、ソフトが民間ときっちりと役割分担し、新しい湯治の宿を作りたいものだ。